第６篇　労賃

第17章 労働力の価値または価格の労賃へ

の転化

〔浜林正夫、「『資本論』を読む」p.175〕

剰余価値の理論がマルクス経済学の要にあるが、この理論の前提が、資本家が労働者から買うのは労働力であって労働ではないという命題である。

ここでは、必要労働と剰余労働から

なる労働日全体のうち、実体的には必

要労働部分を生活手段の形でとりもど

すにすぎない労働力の価値が、労働日

全体の労働への価値が支払われるもの

とみなされ、それによって剰余労働の

搾取関係が隠蔽されている関係に考察

が加えられている。

〔伊藤誠、『資本論』を読む、講談社学

術文庫　p.202）

人間の労働は、生産者自身の維持に

当てられる必要労働部分と他人を養う

ことができる剰余部分に分けられる。

〔社会科学辞典〕

搾取とは、生産手段の所有者が他人

の労働 (またはその成果) を不払いで

取得すること。搾取は階級社会になっ

て発生した。

〔的場昭弘　超訳「資本論」〕

・労働力商品の二重性は、他の商品の二

重性とは違い、不等価交換の源泉とな

る。他の商品は使用価値と価値が質と

量に分かれているが、労働力商品の使

用価値と交換価値がともに量に還元で

きる。不等価交換はその結果に起こる

問題である。

・労働者が売るものは労働であるが、そ

れは労働者という体があってのもの。

資本は労働を獲得するのだが、労働者

のない労働には意味がない。

・「労働の価値」という表現には問題が

ある。「労働の価値」の表現には、「すべ

て働いた分への支払い」という意味が

込められ、資本主義社会の問題点が不

明となる。

・労働が商品だとすれば、売買は需給関

係で決まる。この商品の持ち主は、原価

を割るとたちどころに死んでしまう。

そして需給関係以上に、原価をつくり

出す。

・労働の価値が労働力の価値ならば、そ

れはその持ち主の再生産費用となる。

すると、今度は、それは12時間という

全労働日を意味するのか、という問題

に突き当たる。

・「労賃」という言い方は、もはや必要

労働や剰余労働との関係を一切含まな

い。賃金は12時間労働すべての対価だ

となっている。価値ではなく、貨幣によ

る「価格」という表現によって、すべて

が見えなくなる。

(賃金は労働の価格か)

マルクスは、価値の問題をしつこく

追究したが、資本主義社会の用語には、

真の人間関係の意味が消されているこ

とを明らかにするためだった。

（P.929） ブルジョア社会の表面では、労働者の賃銀は、労働の価格、すなわち一定分量の労働に対して支払われる一定分量の貨幣として現れる。ここでは、人は、労働の価値について語り、この価値の貨幣表現を労働の必要価値または自然価格と名づける。他方、人は、労働の市場価格、すなわち労働の必要価格の上下を変動する価格について語る。しかし、商品の価値とはなにか？商品の生産に支出された社会的労働の対象的形態である。また、われわれは、この価値の大きさはなによってはかるのか？商品に含まれる労働の大きさよってである。それでは、たとえば、12時間労働の価値は、なにによって規定されるであろうか。12時間労働日に含まれる12時間労働によって－これは、ばかげた同義反復である。

ブルジョア社会の労働者の賃金は労

働の価格として現れる。「12時間働いた

から、これが12時間分賃金ですよ」と

そこには、搾取がないように見える。

「12時間労働日に含まれる12時間

労働」の答えは、何の意味もなさない。

〔伊藤誠〕－資本主義以前。庭師は1

日、12時間の労働だった。2時間で1シ

リングの価値が生み出されているなら、

12時間の1日労働日は6シリングの報

酬が与えられる社会だった。労働サー

ビスを売っていた行為はありえたので

ある。

資本主義のもとで、労働者が1労働

日の全労働時間にあたる12時間が生み

出す等価として6シリングを受け取る

なら、どうなるか。労働者は買い手のた

めに剰余価値を生産せず、その結果6シ

リングは資本に転化されず、資本主義

の基礎がなりたたない。

（労働の生産物を売る場合）

（p.930）労働は、商品として市場で売られるためには、それが売られる以前にともかく存在していなければならないであろう。しかし、労働者が労働に自立的な存在を与えうるのであれば、彼は、商品を売るのであって労働を売るのではないであろう。

労働が売られるとは、すなわち労働が

商品となることである。商品である労

働が売られるためには、必ず、「実存」

していなければならない。労働者は労

働によって商品をつくるのである。そ

して品物として売るという形である。

「自立的実存」とは、労働者の労働が一

つの商品に具体化され、自立したもの

として現れることをいう。すなわち、労

働者は商品を売るのであって、労働を

売るのではない。

労働の値段は、商品という物に含まれ

て現れてくる。3シリングが商品に含ま

れている。この場合、品物が価値どおり

(3シリング)に売られるとしたら、剰余

を生まない。

資本主義の基礎がなくなる。独立生産

者のお互いの取引は剰余を生まないし、

それは不等価交換になってしまう。

　結論－「労働を売る」ということは、

労働者が商品という形にかためること。

商品をつくるという実態が「労働を

売る」という姿である。商品という

かためて売る場合には、剰余は生じな

いか、あるいは不等価交換になる。資

本主義が成り立たなくなる。すなわち

労働は売ることができない。

→「労働力である」へと進む。

（p.931） このような矛盾は別として、貨幣すなわち対象化された労働と、生きた労働との直接的交換はまさに資本主義的生産の基礎上ではじめて自由に展開される価値法則を廃除するか、または、まさに賃労働にもとづく資本主義的生産そのものを廃除するであろう。12時間の労働日は、たとえば6シリングの貨幣価値で表される。いま、等価物どうしが交換されるとするものとしよう。そのときには、労働者は12時間の労働と引き換えに6シリングを受け取る。彼の労働の価格は、彼の生産物の価格と等しいであろう。この場合、買い手のためにはなんらの剰余価値は生産せず、6シリングは資本に転化せず、資本主義的生産の基礎は消滅することになるであろうが、しかし、この資本主義的生産の基礎においてこそ、労働者は自分の労働を売り、彼の労働は賃労働なのである。そうでなくては、労働者は12時間の労働と引き換えに6シリングよりも少なく、すなわち12時間の労働よりも少なく受け取るものとしよう。12時間の労働が、10時間、6時間などの労働と交換される。このように不当な大きさを等置することは、価値規定を廃除するだけでない。このような自己自身を廃除する矛盾は、およそ法則といい表わし、または定式化することすらできない。

12時間の労働日は、6シリングの貨

幣価値で表される。交換は等価物どう

しである。労働者は12時間の労働と引

き換えに6シリングを受け取る。彼の

労働の価格は、彼の生産物の価格と等

しい。

→資本主義生産の基礎が消滅する。

労働者は自分の労働を売り、彼の労

働は賃労働である。労働者は12時間の

労働と引き換えに6シリングよりも少

なく（12時間よりも少なく、10時間、

6時間の労働と）交換される

→価値規定を廃除する。定式化でき

ない

（売るのは労働ではなく労働力）

（p.932）一方は対象化された労働であり、他方は生きた労働であるという形態的区別から、より多くの労働と少ない労働との交換を導き出すことはなんの役にも立たない。一商品の価値は、現実にその商品のうちに対象化されている労働の分量によってではなく、その商品の生産に必要な生きた労働の分量によって規定されるのであるだけに、右のやり方は、なおのことばかげている。ある商品が6労働時間を表わすとしよう。もし、この商品を3時間で生産しうる諸発明がなされるならば、すでに生産された商品の価値も半減する。この商品は、いまや、以前の6時間ではなく、3時間の社会的必要労働を表わす。したがって、商品の価値の大きさを規定するのは、その商品の生産に必要な労働の分量であって、労働の対象的形態ではない。

　商品市場で貨幣所有者に直接に相対するのは、実際には労働ではなく、労働者である。労働者が売るものは彼の労働力である。彼の労働が現実に始まるやいなや、彼の労働はすでに彼のものではなくなっており、したがってもはや彼によって売られることはできない。労働は価値の実体であり、価値の内在的尺度であるが、労働そのものはなんの価値ももたない。

労働者が売るのは労働ではなく、労働

力であり、労働は価値をつくるのであ

って、労働そのものは価値をもたない。

労働力とは、労働者の身体に備わって

いる力であり、労働とはその力を発揮

することである。価値は労働の塊りで

あるが、労働そのものは、価値として表

されるものではない。

アダム・スミスの「自然価格」

（p.934）古典派経済学は、日常生活からたいした批判なしに「労働の価格」というカテゴリーを借用し、そのあとで、この価格がどのように規定されるか？と自問した。

〔浜林〕古典派経済学では、労働と労

働力の区別をしないまま、「労働の価格」

を研究した。そして賃金は需要と供給

の関係で決まると考えた。重農主義者

は「必要価格」と呼んだ。アダム・スミ

スは「自然価格」と表現した。賃金は、

需要と供給で上下する。長い目で見れ

ば一つの平均的な線に落ち着き、アダ

ム・スミスはそれを「自然価格」と名づ

けた。

アダム・スミスは「自然価格」を労働

者の生産費（生活費）によって決まって

くると考えたが、労働と労働力の区別

をしなかったために、搾取関係を見抜

くことができなかった－労働の「自然

価格」とは実際には「労働力の価値」の

ことだったのである。

（p.936）そこで、われわれは、まず、労働力の価値および価格が、労賃というそれらの転化形態にどのように表されるかを見てみよう。

　周知のように、労働力の日価値は、労働者の一定の寿命―これには労働日の一定の長さが照応する―にもとづいて計算されている。慣習的な労働日が12時間であり、労働力の日価値が3シリング、すなわち6時間労働を表わす一つの価値の貨幣表現であると仮定しよう。労働者は、3シリング受け取るならば、12時間にわたって機能する彼の労働力価値を受け取るのである。いま、労働力のこの日価値が、日労働の価値として表現されるならば、12時間労働は3シリングの価値をもつ、という定式が生じる。こうして、労働力の価値が労働の価値を規定し、または―貨幣で表現されるならば―労働の必要価格を規定する。これに反して、労働力の価格がその価値から背離するならば、労働の価格も、同じように、そのいわゆる価値から背離する。12時間労働にたいして、たとえば6時間労働の価値生産物、すなわち3シリングを受け取る労働者の対場に立ってみれば、彼にとっては、実際は、彼の12時間の労働が3シリングの購買手段である。

労働者が12時間働いて、その報酬だ

といって3シリングをもらう。この3

シリングは彼の労働力を維持していく

ための費用＝労働力の価値である。

12時間のあいだにつくりだされる価

値は6シリングである。

労働の価格というものが彼の労働に

よってつくりだされた全体であるなら

ば、それは6シリングである。

すなわち、6シリングの価値をつくり

出す労働力が３シリングの価値をもっ

ているということになる。

　　　　　　労働力という商品は、自分自身の価値以上の価値をつくり出す、特別な性格を持った商品なのである。したがって、3シリングの価値をもつ労働力が6シリングの価値をつくり出すのである。ところが、労働の価格ですよと３シリング渡されると、不払い労働が見えなくなる。

p.937を含めた解釈

労働者は12時間のあいだ機能する労

働力の再生産に6時間を必要とする→

仮に労働力の価値は3シリングである。

労働力の価値生産物は6シリングで

ある。労働力は実際に12時間機能し、

そして労働力の価値生産物は、労働力

自身の価値によってではなく、労働力

が機能する継続時間によって決まる。6

シリングの価値をつくり出す労働が、3

シリングの価値をもつという、一見ば

かげた結論となる。

（p.937）労働の価値とは労働力の価値を表わす不合理な表現にすぎないから、労働の価値は、つねに労働の価値生産物より小さくならなければならないという結果がおのずから生じる。というのは、資本はつねに労働力そのものが、労働力そのものの価値の再生産に必要であるよりも長く、労働力を機能させるからである。右の例では、12時間のあいだ機能する労働力の価値は3シリングであり、労働力はこの価値の再生産に6時間を必要とする。これにたいして、労働力の価値生産物は6シリングである、なぜなら、労働力は実際に12時間機能し、そして労働力の価値生産物は、労働力自身の価値によってではなく、労働力が機能する継続時間によって決まるからである。こうして、6シリングの価値をつくり出す労働が、3シリングの価値をもつという、一見ばかげた結論が得られる。

　さらに明らかなように、労働日の支払い部分すなわち、6時間の労働を表わしている3シリングの価値が、6不払時間を含む12時間の総労働日の価値または価格として現れる。したがって、労賃の形態は、必要労働と剰余労働とへの、支払い労働と不払い労働とへの労働日の分割のあらゆる痕跡を消してしまう。すべての労働が支払い労働として現れる。夫役労働では、夫役者による自分自身のための労働と彼による領主のための強制労働とは、空間的にも、時間的にも、はっきり感覚的に区別される。奴隷労働では、労働日のうち、奴隷が自分自身のために労働する部分さえも、彼の主人のための労働として現れる。彼のすべての労働が不払い労働として現れる。逆に、賃労働では、剰余労働または不払い労働さえも支払い労働として現れる。奴隷の場合は、所有関係が、奴隷の自分自身のための労働を隠蔽し、賃労働の場合には貨幣関係が、賃金労働者の無償労働を隠蔽する。

（労賃への転化はごまかしの基礎）

（p.938）そこから、労働力の価値および価格を労賃の形態に――または労働そのものの価値および価格に――に転化することの決定的重要性が理解される。現実の関係を見えなくさせ、まさにその正反対のことを示すこの現象形態は、労働者および資本家のもつあらゆる法律観念、資本主義的生産様式のあらゆる神秘化、この生産様式のあらゆる自由の幻想、属流経済学のあらゆる弁護論的たわごとの、基礎をなしている。

（p.939）世界史が、労賃の秘密を見破るには長い時間を要するにしても、逆にこの現象形態の必然性、〝存在理由〟を理解することほどたやすいことはない。

　資本と労働との間の交換は、われわれの知覚には、さしあたり、他のすべての商品の売買とまったく同じ仕方で現れる。買い手が一定の貨幣額を与え、売り手が貨幣とは違うある物品を与える。法律意識は、ここではせいぜい素材的区別を認識するのみであって、その区別は、〝あなたが与えうるために私は与える、あなたがなしうるために私は与える、あなたが与えうるために私はなす、あなたがなしうるために私がなす〟という法律的等置の定式で表される。

　そのうえ、交換価値と使用価値とは、それ自体としては同単位で計算できない大きさであるため、「労働の価値」「労働の価格」という表現は、「綿花の価値」「綿花の価格」という表現よりも不合理であるようには見えない。さらに加えて、労働者は、労働を提供したあとに支払いを受ける。そして、貨幣は支払い手段としてのその機能においては、提供された物品の価値または価格、すなわちこの場合は提供された労働の価値または価格を、事後において実現する。最後に、労働者が資本家に提供する「使用価値」は、実際には彼の労働力ではなく、労働力の機能、すなわち、裁縫労働、製靴労働、紡績労働などというある特定の有用労働である。この同じ労働が、他の面からすれば、一般的な価値形成要素であるということは、労働の他のすべての商品から区別する属性ではあるが、そのことは普通の意識の領域からは抜け落ちる。

（1）「労働の価値という表現が「綿花

の価値」という表現と同じようにまか

りとおる。

（2）賃金は後払い。働いた後に賃金

を受け取る。あたかも労働に対する報

酬であるかのような錯覚を起こしやす

い。

（p.940）12時間労働にたいして、たとえば6時間労働の価値生産物、すなわち3シリングを受け取る労働者の対場に立ってみれば、彼にとっては、実際は、彼の12時間の労働が3シリングの購買手段である。彼の労働力の価値は、彼の通例の生活手段の価値の変化につれて3シリングから4シリングに、もしくは3シリングから2シリングに変化するかもしれないし、または彼の労働力の価値は不変なのにその価格が需要供給関係の変動によって4シリングに騰貴、もしくは2シリングに低下するかもしれないが、彼はつねに2時間労働を与える。だから、彼が受け取る等価物の大きさにおける各変動は、彼にとっては必然的に彼の12時間労働時間の価値または価格の変動として現れる。この事情は、逆に、労働日を不変の大きさとして取り扱うアダム・スミスを誤らせて、こう主張するにいたらせた――生活手段の価値が変動し、そのために同じ労働日が労働者にとってはより多くの、またはより少ない貨幣として表されるとしても、労働の価値は不変である、と。

（3）12時間働いた賃金が3シリング

から2シリングになると、12時間労働

の価値または価格が変動したようにみ

える。

（p.941）他方、資本家のほうを見ると、彼は、もちろん、できるだけ少ない貨幣で、できるだけ多くの労働を手に入れようとする。だから、資本家が実際に関心をもつのは、労働力の価格と労働力の機能がつくり出す価値のあいだの差だけである。しかし、資本家は、すべての商品をできるだけ安く買おうとしており、そしていつでも、自分の利潤を、価値より安く買い価値より高く売るという単純な、トリックから説明する。それだから、もし労働の価値というものが現実に存在しており、彼がこの価値を現実に支払うとすれば資本は存在しないであろうし、彼の貨幣は資本に転化しないであろうということは、彼にはわからない。

　加えて、労賃の現実の運動の示す諸現象は、支払われるのは労働力の価値ではなく、労働力の機能すなわち労働そのものの価値であるということを証明するように見える。これらの現象は、二大部類に還元できる。第一は、労働日の長さの変動にともなう労賃の変動である。同様に機械を1週間賃借するほうが、1日賃借するよりも費用がかかるのだから、支払われるのは機械の価値ではなく、機械の作動の価値であると結論することもできたであろう。第二には、同じ機能を果たすさまざまな労働者たちの労賃の個人的な違いである。この個人的な違いは、労働力そのものがあからさまに、とりつくろいなしに売られる奴隷制度においても――しかし錯覚の余地なく――見いだされる。ただ、平均を超える労働力の利益、または平均を下回る労働力の不利益が、奴隷制度では奴隷所有者のものとなり、賃労働制度では労働者自身のものとなるだけである。なぜなら、彼の労働力は、後者の場合には労働者自身によって売られ、前者の場合は第3者によって売られるからである。

　ところで、「労働の価値および価格」または「労賃」という現象形態は労働力の価値および価格という本質的関係――これが現象となって現れる――とは区別されるが、この現象形態については、この現象形態については、あらゆる現象形態とそれらの隠されている背景について言えるのと同じことが言える。現象形態は、直接に自然発生的に、普通の思考形態として再生産されるが、その隠されている背景は、科学によってはじめて発見されなければならない。古典派経済学は、真の事態にはほぼふれてはいるが、しかし、それを意識的に定式化していない。古典派経済学は、そのブルジョア的な皮をまとっている限り、そうすることはできない。

（4）労働時間の長さが変化すると賃

金が変化する。よけい働いたらよけい

もらえる。

（5）よく働く人とあまり働かない人、

有能な人とそうでない人など、働きに

応じて賃金が支払われている。

|  |
| --- |
| 搾取とは、生産手段の所有者が他人の労働 (またはその成果) を不払いで取得すること。人間の労働は、生産者自身の維持に当てられる必要労働部分と他人を養うことができる剰余労働部分に分けられが、搾取は階級社会になって発生した。（社会科学辞典） |
|  | 所有関係と生産者 | 搾取の現象形態（現われ方） |
| 奴隷制社会 | 奴隷主が生産手段と奴隷自身(=生産者)を完全に所有した。奴隷は売買された。 | 奴隷自身のための労働さえも主人のための労働として現れ、すべての労働が不払い労働と現れる。奴隷は生産物の一部で養われていた。 |
| 封建制社会 | 封建領主が土地を大規模に所有し、農奴を人身的に隷属し、不完全に所有した。 | 自分のための労働と領主のための強制労働は空間的、時間的、感性的に区別されている。労働地代－領主の直営地で働く。物納地－例　米の半分を領主に納める。 |
| 資本主義社会 | 資本家が生産手段を私的に所有し、「自由」な賃金労働者が商品を生産する。労働は必要労働（生存費）と剰余労働に分けられる。 | 貨幣関係(賃金制度)が労働者の無償労働を覆いかくしている。すなわち、剰余価値の不払い労働さえ、労働者への支払い労働として現れる。→「資本主義の秘密へ」 |
| マルクス主義経済学講座（上）p.212 |